

川越市立博物館

博物館だより

第13号



岩崎勝平作 小憩 1936年

作品解説

妙高高原の関温泉近くの山で働く人達を描いた作品で昭和11年の文展に出品され、高い評価を得、選奨を受賞し新進画家として画壇に登場することになった代表作です。

春先、制作中に雪が融けないように川越の実家からトラックで塩を運びこみ、山中へ撒いたといいます。

審査員の一人、山本鼎は次のように評してい

ます。「農村の青年達が山帰りに焚木を置いて雪の上に小休みしている情景を描いたものである。雪の上だから人物も焚木の束もシルエットに浮き出ている。その配置に面白みがあって且つ極めてナチュラルなのが第一の魅力である。色彩も黒っぽく洒落ているし筆致も素朴で全幅の好趣味に選奨を受ける資格があった。」

「武総将棋手相鑑」と川越(上)

(1)はじめに

みなさんは、“番附”というものを見たことがあるでしょうか。

江戸時代に作られた相撲番附になぞらえて、文人墨客、絵師、流行などの対比高下をつけたもので、江戸時代以降盛んに作られました。

川越市立博物館でも、『関八州田舎分限角力番附』（江戸時代後期）や『武州川越繁昌店万代鏡』（明治18年）、『埼玉県川越志木宿商店繁栄一覧表』（明治20年）の写真パネルや複製が近世・近代の展示コーナーで展示されています。

今回は、そのように数多く作られた番附の一つである『武総将棋手相鑑』（将棋博物館蔵、明治20年）と、そこに名前の載った川越ゆかり

の一人の人物について紹介したいと思います。

(2)3月のある日、大阪で

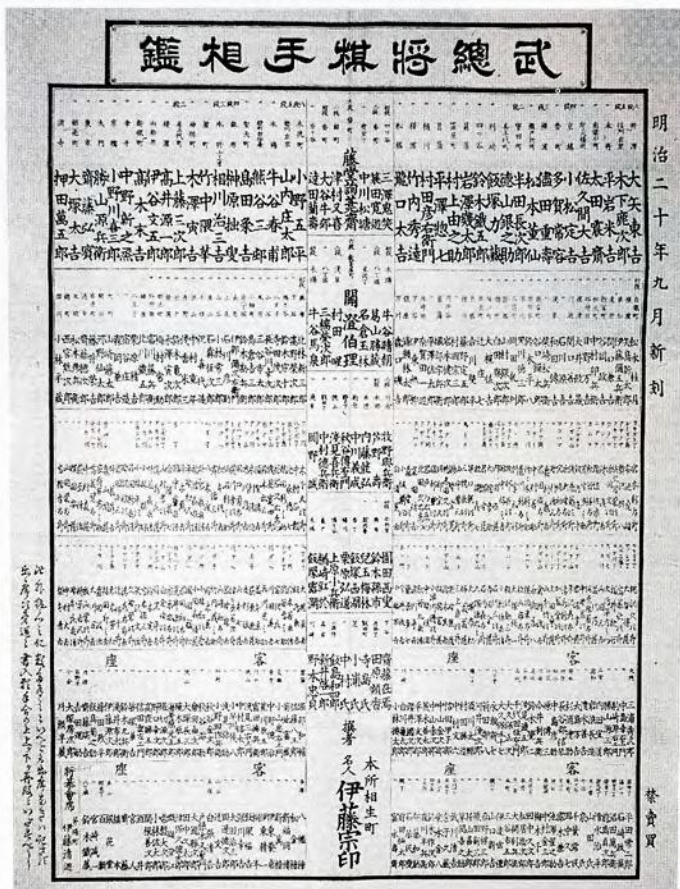
この資料との出会いは、全くの偶然によるものでした。

今後の講座・教室の企画に関する調査の一環として(財)日本将棋連盟関西支部の将棋博物館へ調査へ行ったときのことです。

休憩をかねて展示資料を見学していると、一枚の木版刷りが目に留まりました。

「ふーん、番附か。こんな資料もあるんだ。何々、『武総将棋手相鑑』だって、やっぱり東京の人ばかりかな。あれ、川越の人もいるよ。あっ、こっちにもいる。」

これが、私と『武総将棋手相鑑』（以下『手相鑑』と略する）との出会いでした。



◀写真1「武総将棋手相鑑」（将棋博物館蔵）

(3)どんな内容だろう？

さて、こんな経緯で会うことになった『手相鑑』ですが、いったいどんな内容なのでしょう
うか。

この資料は、武蔵国（現在の東京都・埼玉県
および神奈川県の一部）と下総国（現在の千葉
県の一部）在住の将棋界にゆかりのある人物の
番附で、明治20年（1887）9月新刻の日付になっ
ています。（写真1）

この番附には合計418人もの人名が記されて
いますが、中には旧津（三重県）藩主や旧幕府
に仕えた将棋の家元やその流れをくむ者なども
名前を連ねており、特に伊藤宗印、小野五平に
ついては明治時代に相次いで名人位を継いでい

ます。

これらの人々の地域的な分布としては〔表1〕
のように圧倒的に東京、しかも江戸時代からの
市街地と下町に集中しています。また、埼玉県
においては、現在川越市域となっている地域の
住人が最も多く、大宮市・浦和市がそれに次い
でいます。

このことから、川越は政治・経済のみならず
文化においても江戸・東京と密接につながりを
持ちつづけてきたことがうかがえます。

さて、今回はこの番附の中から、川越ゆかり
の人々の一人である「仙波 原 傳三」の事蹟
を紹介したいと思います。

（教育普及係 鹿倉 航）

〔表1〕『武総将棋手相鑑』における地域分布内訳

東京都	23区内 243		258		
	・中央区	68		・新宿区	6
	・台東区	54		・文京区	4
	・千代田区	36		・豊島区	3
	・江東区	32		・足立区	2
	・墨田区	20		・渋谷区	1
	・港区	11		・区不明	6
埼玉県	都下 15		86		
	・川越市	15		・加須市	2
	・大宮市	13		・坂戸市	2
	・浦和市	12		・川口市	1
	・東松山市	7		・所沢市	1
	・菖蒲町	7		・草加市	1
	・三郷市	6		・上尾市	1
	・桶川市	5		・岩槻市	1
	・幸手市	3		・杉戸町	1
	・鳩ヶ谷市	3		・白岡町	1
	・騎西町	3		・市町村不明	1
	千葉県			38	
	神奈川県			32	
その他			2		
不明			2		

参考資料・協力者一覧は次回まとめて掲載いたします。

イワサキカツヘイ 神さま絵かき 岩崎勝平 (1905—1964) —その芸術と生涯—

はじめに

文豪川端康成から「神さま絵かき」と絶賛された鬼才の洋画家岩崎勝平。しかし、その生涯は文展で2年連続して特選をとるなど昭和10年代の画壇に華々しく登場し新進画家として将来を囑望されたにもかかわらず、不遇で貧乏に喘ぎながらの放浪的な孤独なものでした。戦時色の濃くなった昭和16年暮れ以降画壇を離れ、忘れられ、戦後は川端康成、河北倫明など一部の識者からは、東京百景シリーズ、女十二題シリーズなどに見られるように素描画家として注目されましたが、画壇からは黙殺され報われることなく、画壇への復帰もかなわずに失意のうちに亡くなりました。

地元川越でも画家として活躍していた戦前の岩崎勝平を知っている人は数少なくなりました。戦後の放浪的な生活を送っていた頃のことを知っている人が大部分で、岩崎勝平というと貧しい身なりをした迷惑の口といった記憶の方が優れているのが実情で、素晴らしい作品を残しながら画家としては忘れられた存在です。貧困のうちに放浪的な生活を送っていたこともあって戦後は素描による東京百景展、女十二題展を東京で計4回開催しただけで戦前の油絵作家としての時代の優れた作品は公開される機会がありませんでした。没後の回顧展も小規模なものが2～3回開かれただけで、まとまった展覧会は平成3年10月に当館で開催されたものが初めてで今回の没後30年記念展が2回目になります。

生い立ち

岩崎勝平は明治38年(1905)8月15日、川越町大字川越862番地(現在の川越市幸町7番地)で育太郎、満つの7男として生まれました。生家は洋物商を営む裕福な商家で、父親は川越商

工会議所の副会頭を勤めた地元の有力者の一人でした。父方の親族には、福沢諭吉の娘婿で電力事業に活躍した福沢桃介、歌人として知られた伯母杉浦翠子の夫でデザイナーとしてだけでなく、洋画家としても活躍し光風会の創立にも参加した杉浦非水の二人の伯父がおり、その生涯に大きな影響を受けました。特に、一生の仕事として画家を志したこと、また、生涯の師と



自画像(東京美術学校卒業制作、東京芸術大学蔵)

して仰いだ岡田三郎助への入門も伯父、非水の影響によるものです。

大正7年(1918)川越中学校(現県立川越高校)に入学し、在学中から絵画の世界に情熱を傾けるようになり、大正11年(1922)頃から杉浦非水の紹介により岡田三郎助の指導する本郷洋画研究所へ通い始め画家を志すようになりました。川越中学校卒業後は、東京渋谷の杉浦非水宅に寄宿しながら本郷洋画研究所へ通い、大正14年(1925)東京美術学校(現東京芸術大学)西洋画科に入学し、引き続き岡田三郎助に師事するとともに、第3学年から卒業するまで、当時浪漫主義絵画の旗頭であった藤島武二の教室

に入り師の薫陶を受けました。東京美術学校時代の岩崎勝平は、福沢桃介からの経済的援助もあって何不自由なく勉強に専念できたといいます。

画壇への登場

昭和5年（1930）東京美術学校西洋画科を卒業し、画家としての第一歩を歩み始めます。卒業後、岩崎勝平の名が最初に画壇に登場するのは昭和7年の春台美術展と光風会展からで、以後旺盛な制作活動を行い、出品記録が残ってい



焚木はこび（東京国立近代美術館蔵）



砂上裸婦（当館蔵）

るものだけに限っても昭和16年の第4回新文展までの間に春台美術展、光風会展を中心にほぼ毎年出品を続け、生涯の代表作の大半をこの時期に集中的に発表しています。

画業のうえで特筆されることは、昭和11年の



父の霊に捧ぐ（個人蔵）

文展に出品した妙高高原の関温泉に取材した「小憩」が選奨を受け、また、続いて翌12年の第1回新文展に出品した同じ主題の「焚木はこび」が特選となり、同年第12回春台美術展で「砂上裸婦」が特賞を、昭和16年の第16回春台美術展では「父の霊に捧ぐ」が師、岡田三郎助の名に因んだ岡田賞を受け、昭和10年代の画壇に華々しいデビューを遂げ新進画家として将来を嘱望されるに至ったことです。

この時代は、一生の間でも特に恵まれた時代で、父親からの経済的支援だけでなく叔父、福沢桃介からの援助もあったといわれ、画壇での評価も上がり平穏な画生活を送っています。北海道、信州、伊豆、関西、瀬戸内に取材し、遠く朝鮮にも足を延ばして佳作を多く残しています。昭和14年には光風会会員に推挙され、文展も無鑑査となって全盛期を迎えます。

—— 次回に続く ——

（館長補佐 小林 誠）

川越氷川神社発見の剣形品に就いて

1. 剣形品の発見

昭和23年7月20日。川越氷川神社宮司山田勝利氏は境内南側の芋畑から奇妙な石を発見しました。全長約6cm、木葉形でつやつやと黒光りしています。氏はこれを古墳時代の祭具である剣形品と考え、社宝として大切に保管しました。

この資料は、当時県史編纂室顧問であった柴田常恵氏、國學院大学教授大場磐雄氏らの調査を経て、昭和29年の大護八郎『遠古の川越』、昭和47年の『川越市史 第一巻 原始・古代編』に紹介され、広く知られるようになりました。

このように、この剣形品は古くから知られた資料ですが、年代や出土遺跡の性格が不明であるなどいくつかの問題点をもっていました。本稿では山田勝利氏よりご寄託いただいた境内採集遺物の検討と出土遺跡の踏査の成果からこの剣形品について検討してみたいと思います。

2. 出土遺跡を探る

剣形品が出土した芋畑は、現在では氷川神社の駐車場になっています（第1図☆）。周辺の地形は川越城の築城・改修や近年の市街化によっ

て大きく改変されていますが、北と東から入り込む深い谷筋により形成された舌状台地上に立地しています。採集地点の標高は約16mで東方に広がる荒川低地との比高差は4mほどです。

遺跡を実際に歩いてみると、慰霊塔の周辺や氷川公園のあたり、境内西側の八坂神社から本殿の北側にかけてなどに古墳時代の土器片がまばらに散布しています。土器片の分布範囲や密度、地形などから想定されるこの時代の集落は東西120m×南北150mほどの範囲です。

これらのことから、剣形品を出土した氷川神社境内の遺跡は、狭い舌状台地の平坦面に展開する小規模な集落跡と考えられます。

3. 年代を探る

第2図は採集された遺物の実測図です。1が問題の剣形品。滑石製で全長6.3cm、幅3.2cm、厚さ0.9cmほどの大きさです。表・裏面とも丁寧に鑢がかけられ、きれいな木葉形に仕上げられています。本品は成形が丁寧なこと、片面に鍔をもつことなど比較的古い様相を示しています。

出土土器は4世紀前葉から6世紀前葉までの

☆は剣形品採集地点
実線は古墳時代遺物の採集範囲



第1図 剣形品採集地点周辺の地形（1：15000）

年代幅をもちます。中でも5の埴、6の壺、8・9の高坏など5世紀中～後葉の土器が最も多く、本遺跡の中心がこの時期にあることが想定されます。他にも7の高坏、4の鉢など4世紀の土器や2・3の坏など6世紀の土器も出土しています。

このように本遺跡の剣形品は、形態的に古い特徴をもつこと、遺跡の形成が5世紀中～後葉を中心とすることなどから、同時期の祭祀に用いられた可能性が考えられます。

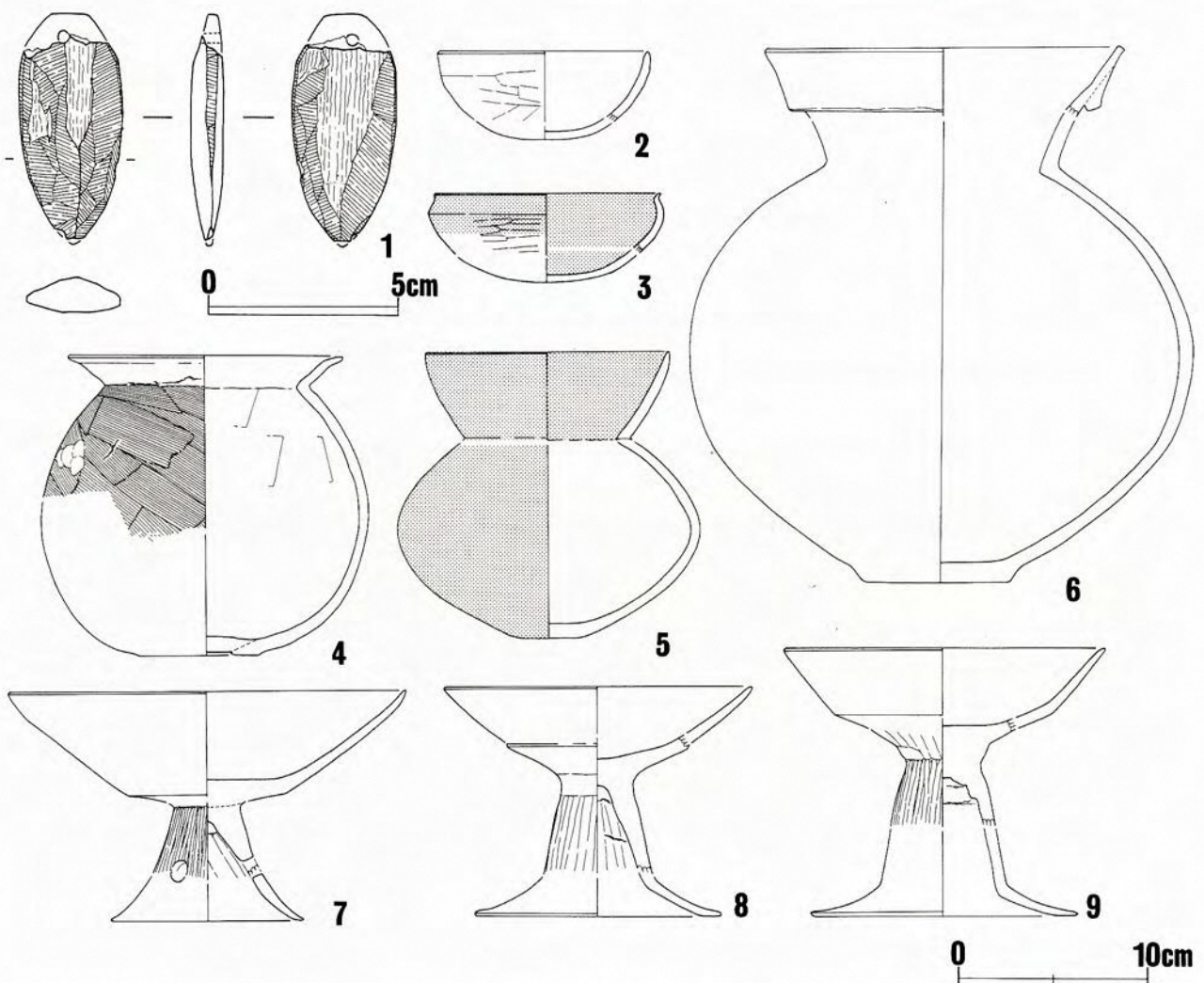
4. 集落の祭祀・住居の祭祀

小畦川流域の御伊勢原遺跡・上組遺跡・女堀遺跡では剣形品・勾玉・白玉・有孔円板など多数の石製模造品を伴う祭祀遺構が発見されています。これらは台地上の広い平坦面に立地し、

女堀遺跡13軒、御伊勢原遺跡68軒、上組遺跡23軒など多数の住居跡からなる拠点的な集落です。これに対し、氷川神社境内の遺跡は狭い舌状台地上の小集落で他の祭祀遺物が確認されないなど小畦川流域の遺跡群とは著しく異なります。これは集落内で行われた祭祀の規模や質的な違いを暗示しています。

5世紀以降の集落では特定の住居跡から石製模造品が出土する傾向があります。本遺跡の剣形品も住居内で行われたこのような家ごとの祭祀に使われた可能性が高いと考えられます。

末筆ですが、今回資料紹介の機会を与えて下さった川越氷川神社の山田勝利先生にお礼申し上げます。(学芸係 岡田 賢治)



第2図 剣形品と採集土器

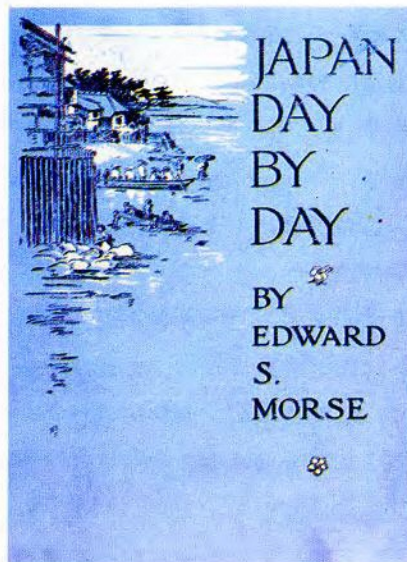
●●● ただいま準備中 ●●●

当館では現在、平成7年3月25日（土）から5月14日（日）まで開催する第8回企画展『川越学事始め～郷土史の系譜を追う～』の準備を進めています。

川越は県内でも郷土史研究が盛んな地域です。こうした陰には江戸時代における地誌の刊行、各学校による郷土調査、川越市立図書館を中心にした郷土史家の活動、在野の考古学研究者たちによる出土品の収集などの地道な積み重ねがありました。今回の展示では、こうした郷土史の先達たちの埋もれた業績を再評価し、これからの郷土史研究の新たな出発点にしたいと考えています。

右に掲げた本は「考古学事始め」のコーナーに展示予定のE. S. モース著「JAPAN DAY BY DAY（日本その日その日）」です。

“日本近代考古学の父”と呼ばれる著者は、川越氷川神社宮司の山田衛居と親交があり、明治15年（1882）に川越を訪れています。 E. S. モース「JAPAN DAY BY DAY」



利用のご案内

- 開館時間 午前9時から午後5時まで ただし入館は午後4時30分まで
- 休館日 月曜日（休日は除く） 休日の翌日（土曜日又は日曜日は除く）
12月28日から1月4日まで 館内整理日（毎月第4金曜日、ただし休日は除く）
- 入館料 <常設展>
大人200円（160円）、学生・生徒100円（80円） 児童50円（40円）
（ ）は20人以上の団体料金 特別展については別に定めます
<川越城本丸御殿、川越市蔵造り資料館との三館共通券>
大人300円、学生・生徒150円、児童80円
- 交通手段 J R川越線・東武東上線川越駅から東武バス札ノ辻下車徒歩8分
西武新宿線本川越駅から東武バス札ノ辻下車徒歩8分
西武バス市役所前下車徒歩5分

利用状況

（単位：人）

月	一般			団体			共通				その他			合計 入館者合計
	大人	学生・生徒	児童	大人	学生・生徒	児童	大人	学生・生徒	児童	他館購入	招待	免除		
7月	982	171	188	149	0	0	830	57	73	959	60	725	4,194	
8月	2,369	437	641	105	0	81	1,651	217	280	2,389	123	884	9,177	
9月	2,400	179	301	621	5	15	1,908	97	98	2,817	111	2,332	10,884	
10月	3,808	234	359	883	207	91	3,046	98	178	5,546	283	3,878	18,611	
11月	2,784	475	350	681	3	0	3,238	92	123	4,302	228	7,849	20,125	

発行日

平成7年2月28日

発行

川越市立博物館

〒350 川越市郭町2丁目30番1号

TEL 0492-22-5399